

オンライン講座

ヒルマ・アフ・クリント

探求、そしてシュタイナーとの出会い

Hilma af Klint's quest and her encounter with Rudolf Steiner

世界に彗星の如く“発見”され、現在東京でアジア初の展覧会が開かれているヒルマ・アフ・クリント。生命のリズムや変容を感受し、精神世界を色や形・イメージで表現した「抽象画の先駆者」である彼女が、ルドルフ・シュタイナーとの出会いやにじみ絵によって学んだものとは何か。彼女の生涯や作品を追いながら、人間にとっての探求と変容、そこから生まれる「新たな統合」についてアンドリュー・ウォルパート氏とともに紐解いていきます。



Group IV, No. 7, The Ten Largest, Adulthood (1907) *



Group IV, No. 10, The Ten Largest, Old Age (1907) *



Altarpiece No. 1 Group X (1915) *

アンドリュー・ウォルパート



エマーソンカレッジ（イギリス）での「スピリット・オブ・イングリッシュ」コース、シュトゥットガルト（ドイツ）の大学での「イングリッシュ・イヤー」、ブダペスト（ハンガリー）でルドルフ・シュタイナー・セミナーを主催するほか、ロシアとイタリアのヴァルドルフ学校にも勤務。

2000年代より日本における人智学研究にも積極的に貢献してきた。その美術史研究は、巨石文化、ケルト美術と初期キリスト教美術、イタリア・ルネサンス、19世紀イギリスの芸術家、そしてゲーテアヌムの建物とその周辺における建築、彫刻、絵画、色ガラスといった表現にまで及ぶ。

2025 **5/25**
14:00-15:30

受講方法：オンライン
参加費：2,000円
主催：一般社団法人 日本シュタイナー学校協会
お問い合わせ：godo-euor@waldorf.jp

オンラインチケットの
購入はこちら

QRコードからの
購入はこちら



日本中のシュタイナー学校
の高等部生徒が集う
「芸術祭」を応援しよう！



寄付サイト



チケット販売

“そこにある何か”を見出そうと、人は探求の旅に出る

心に深い憧れを持ち、見えない何かに手を伸ばすように

希望に満ちた出発から、迷い道や険しい山谷を越えて歩み、やがて「想像を超えた何か」に至る旅。目標を見失ってはまた新たに見つける旅路の上でいつの間にか、自分自身が変容しているような旅。

たどり着いたその先で、人は外なる世界を知り、内なる人生の意味を感受します。

芸術家にとってその旅とはまず素材や様式を学ぶこと、ある時点でそれを手放し新たな表現を見出すことで、ヒルマ・アフ・クリントの人生と作品にもそれが如実に表れています。

風景画や肖像画など彼女の具象的な作品には、植物研究や解剖学の基盤に立ちながら、光や色彩を繊細に表現し、魂の雰囲気を見事に伝える、天賦の才があふれています。

しかし本人にとってより切実だったのは「日常の目には見えない深いビジョンを、色や形、イメージで表現すること」でした。

ヒルマは生命に宿る「リズムと変容」に注視しました。『10枚の最大作品』ではそれらが大胆に、『エロス・シリーズ』では繊細に、『白鳥と鳩』シリーズではエネルギーに、『薔薇シリーズ』では性の神聖さを通して、『パルジファル』シリーズでは謎めいた変化を通して、『知識の樹』シリーズでは繊細な形態で、それぞれ描き出されています。

彼女は、植物を観察し、創造的な瞑想を重ねることでこの「変容」をつかみました。繊細な線描はやがて、明確な思考のように直観的な幾何学的表現へと進み、さらにはより本質的な道德的指針にまで至りました。彼女の作品全体に、このような「変化と成長」に関する真理が表れています。一つのイメージが変化して、次の作品に描写される。

そんな連作は観る者に「生きたプロセスをとらえ、過程を肯定する心」を伝えます。

にじみ絵（濡らした画用紙に水彩絵の具を含んだ筆で描く）技法との出会いは、彼女にとって大きな転換点でした。この技法により、連作ではなく一枚の作品の中で、変容のプロセスを体験することができると気づいたからです。

ヒルマが探求を通して得たもの、それはこうした「変容を統合的に示す絵画表現」でした。彼女の人生を通じた芸術の旅は、若き日の友人との作業、精神世界への関心、神智学との結びつきによって広がりました。生前のルドルフ・シュタイナーと出会い、にじみ絵技法を紹介されたことで、長い探求の道のりは成就へと至りました。彼女はゲーテアムで「自分の家に帰った」と感じ、アントロポゾフィー（人智学）に、内に抱いてきた深い願いへの答えを見出しました。1920年代初頭には人智学協会および精神科学自由大学の会員となり、シュタイナー死後の協会運営に失望したものの、1944年に亡くなるまで人智学への献身を続けました。

こうした全てに目を向けると、人間にとっての探求の意味に改めて気づかれます。長い旅路を経ていつしか、当初の予想とは全く異なる成果へと至る、その道中の模索（プロセス）も決して無駄ではない。そんなことが原型的に示されているのです。ヒルマ・アフ・クリントの人生と作品そのものが「変容を、統合的に表現した作品」なのです。